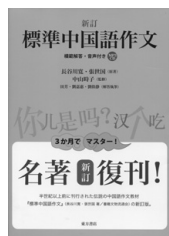


別解の宝庫として生まれかわった名著

遠藤 雅裕



四六判 208頁
東方書店
[本体 2700円 + 税]

長谷川寛・張世国原著／
中山時子監修／田芳校訂
新訂 標準中国語作文

学習書は、勉強する側であれ、おしえる側であれ、実際にそれをつかってみないと、本当の価値はわからない。評者は残念ながらその機会をえなかつたために、本稿は表面的なことがらに終始するかもしれないことを、まずはお許しいただきたい（文中敬称略）。

本書は、長谷川寛著『標準中国語作文』（改訂版）（一九六四年第一刷、一九六七年改訂第二刷、一九九五年改訂第一七刷、書籍文物流通会、「前編」と略称）および『標準中国語作文』続編（改訂版）（一九六七年第一刷、一九九五年改訂第九刷、張世国と共著「続編」と略称）の二書を一冊にまとめたものである（書誌情報は本書の監修者である中山時子の序文と評者の現物確認による）。全八八課（前編六〇課、続編二八課）からなり、各課はキー表現となる語やフレーズ（たとえば第一〇課「在（いる）」・第一九課「正

在（いる）」等）がタイトルとなっている。各課は見開き二ページであり、左ページにタイトル・関連する例題・解説、右ページに練習問題（前編は各課一〇題、続編は各課七題、合計七九四題）・模範解答・単語等となっている。各課のトピックスは、数詞（第一課）・単純な主述文（第二課）から「不但（不但）」（第五三課）・「尽管（尽管）」（第七九課）などから構成される複文にまでわたっている。

著者の長谷川は、一九六三年にはすでに前編を教科書として東京外国語大学の一年次週三回の授業で使用している（佐藤二〇〇〇）。前編序の日付が一九六一年一月三日であるので、当時使用していたものは試用本であった可能性がある。

長谷川は、明治が大正にかわる一九一二年に新潟県に生まれ、一九三四年三月に東京外国語学校支那語部を卒業した。

その後、山口高等商業学校をへて、戦後は東京外国語大学教授をつとめ、一九八一年に逝去している（六角一九九四・佐藤二〇〇〇）。卒年について、六角一九九四では一九八二年としている。長谷川はこの間に中国語の教科書・参考書類を数多く出版している。六角一九九四が「中国語の作文の分野で仕事をした」（二三八頁）と紹介するように、本書のほか、『最新日語支譯の研究』（一九四三年、外語学院出版部、評者未見、六角一九九四より）・『中國語作文』（一九五四年、白水社）などの学習書を出版している。

ところで、外国語学習法は、規則を体系的に学習するトップダウンの方法と、言語刺激を大量にインプットするようなボトムアップの方法に大別できるだろう。両者はいずれも重要で、どちらか一方のみではおおきな学習効果は期待できない。本書はおおくの例題と演習に重点がおかれているために、ボトムアップ的学習書といえるだろう。

本書の出版に際しては、いくらかの修正や補充が成されている。原著と比較して、主たる変更点は（１）ページ構成、（２）文字・単語等、（３）各課タイトル、（４）模範解答、（５）音声教材（CD）の五点である。以下、（１）以外について、本書と前編一九六四年版・一九六七年版との異同を確認しつつその特色をのべてみたい（続編については、評者は残

念ながら確認する機会をえなかったため、原著との対照が必要な場合は、もっぱら前編によることとする）。

まず（２）については、原著をそこなわない範囲で日本語や中国語の表記や単語があらためられている。たとえば、日本語については「電気時計」が「デジタル時計」（第一五課練習四）に、「女中」が「家政婦」（第四四課例題四）にあらためられている。中国語については、つぎのとおりである（前編一九六四年版・前編一九六七年版・本書の順）。

第九課

例題一「病院」

病院 ↓ 医院 ↓ 医院

例題四「喫茶店」

茶館 ↓ 咖啡馆 ↓

咖啡馆 ↓

第三七課

練習五「硬水」

苦水 ↓ 苦水 ↓ 硬水

「飲料水」

甜水 ↓ 甜水 ↓ 饮用水

（３）はタイトルの修正であり、上述のように語やフレーズにあらためている。原著ではほとんどがセンテンスであった。たとえば、前編一九六七年版では、第二三課「君はこの部屋をかたづけなさい！／你把这屋子收拾收拾！」（↓本書「：を／把」）、第二九課「うれしくてたまらない／喜欢得不得了」（↓本書「：てたまらない／不得了」）などである。

タイトルは、当然のことながら例題・練習問題と密接に関連性しているのであるが、特に第六〇課までの前編部分では、

タイトルにはない類義表現などもふくみ、やや複雑な様相を呈している。たとえば、第二二課「一边」では「随」(随々) (学ばはじから忘れる。(随学随忘。))をも、第三一課「又」では「也」(「ほくもいらない、君もいらない、捨てよう。(我也不要、你也不要、扔了吧。))をもあつかっている。さらに、このような場合、最初の例題がタイトルとはことなる場合がある。もちろん類義表現は例題の下「要点」で解説されている。しかし例題とタイトルの関連性は重要であるので、例題の順番を入れ替えるなどの修正がほしいところである。

(4) の模範解答は練習問題に今回あらたに補足されたものである。これはまさに本書の白眉といえ、別解の宝庫となっている。というのは、この模範解答は三名の中国人教師(A先生とC先生は北京出身、B先生は上海出身)によるもので、三名の解答が一致する場合から三者三様の場合まで、バラエティにとんでいるのである。本書全体の解答の一致率は、全一致六・一%、A Bのみ三・六%、A Cのみ七・四%、B Cのみ三・二%、全不一致七九・七%である。つまり練習問題の八割には三つの正解が存在している。この率は問題のパラメータがふえるほどあがり、第三〇課前後から八〇〜一〇〇%になる。たとえば、「彼は私の友人(朋友)ではない。」(第六

課、一三頁)の解答は「他不是我的朋友。」で一致しているが、第三四課練習九「知らない字があつて、わたしは読めません。」の解答は、A「有不认得的字、我不会念。」B「有不认识的字、我读不来。」C「里面有我不认得的字、我念不下来。」のようにすべてこととなっている。

模範解答の多様性は、話者のこのみや母語(方言)の干渉、問題文の多義性などに由来しているとかがえられる。たとえば、B先生の解答で、第一五課練習二の「置時計」(座钟)に「台钟」がつかわれているのは上海語の干渉であろう。第二二課(「一边」)の練習で、C先生の模範解答に「V₁着V₂」という形式がおおいは、個人的なこのみの反映である可能性がある。また、第三五課練習二「車で行けば」についての解答がA「坐车去」・B「开车子去的话」・C「开车去」となるのは、中国語では、自動車に客としての場合と自分で運転する場合では動詞をつかいわけねばならないことによる。これは日本語の問題文が多義的であるためだ。

このように、評者にとっては大変に興味深い模範解答であり、また、模範解答に言語表現の多様性を提示することは学習者にとっても意義深いことだとかんがえる。ただ、独習で本書を使いこなすことができるのは、ある程度中国語力を身につけた人に限定されるだろう。独習者のことを考慮すると、

それぞれの模範解答にも解説をつけるか、模範解答を一つにしぼり、解説で別解を提示する方法がかんがえられるが、紙幅をかんがえろとなやましいところである。

最後に(5)であるが、例題と模範解答について、音声が入り込みの形式で添付されたことも特筆に値する。評者のしるかぎり、作文の学習書に音声がつけられていることはほばない。つまり、問題を解いた後で、模範解答を何度も聞き、発音することで定着をはかることのできるものである。外国語学習において、音声教材の重要性は言をまたない。

このほか、部分的にふるくなっているとはいえ、本書が時代をこえて普遍的である日常的なことがらを主要な題材にしていることも大きな特色である。これは、戦後の、特に中国における共産党政権成立後からしばらくの中国語教育を考慮すると、やはり評価されてよい点であろう。というのは、七〇年代ごろまでの中国語教育は、中国の政治状況の影響をおおかれすくなかれこうむっていたからだ。たとえば一九六〇年代末には、予定されていた第一回中国語検定試験について、毛沢東思想に立脚し「中国語教育は政学一致であるべき」などの意見が外部からだされ、中止に迫りこまれるなどの問題がおきている(日本中国語検定協会一九六八)。当然この時期の教材にもこの種の影響がみえる。宮田一郎は「中

国の情勢に敏感に対応するという点では、テキスト類でも言えますね。文革で毛語録が盛んに振られた時期には、「这是什么？」、「这是毛主席语录。」というような例文が教科書に現われたり。」と述懐している(牛島等一九七九・五)。この種の例としては、「你不是工人阶级吗？买土地想做地主吗？」(中国語友の会一九五七『やさしい中国語三』東京：江南書院、四六頁、練習問題)、「苏联既然(是)有建设社会主义国家的经验，中国就应该向苏联学习。」(金子二郎一九六三『中国語入門(増補改訂版)』東京：大安、一〇〇頁、練習七)などがあげられる。このような時代にあつて、本書は政治の影響が限定的であり、「彼ら中国の青年は毛沢東のアピールに応じて、とつくに労働に参加している(他们中国的青年，响应了毛泽东的号召，早已参加劳动了。)」(第四四課例題六)などの例が散見されるのみである。このような教材における政治の問題は、今後題材論的な検討がさらに必要であろう。

近年は出版物の寿命が短くなり、数年で絶版ということもめずらしくない中で、本書のような半世紀をこえる学習書は稀有である。新訂版の上梓を機に、本書がさらにつかいつづけられることをいのりたい。

【付記】本稿執筆中に、本書の監修者である中山時子先生の訃報

に接した。ここに謹んで中山時子先生のご冥福をおいのりしたい。

参考文献

牛島徳治・宮田一郎・菱沼透・相原茂一九七九「中国語教育の歴史と課題」『中国語』二三七・二一七。

佐藤富士雄二〇〇〇「長谷川寛先生のこゝ」『TONGXUE』一九・三一五。

日本中国語検定協会一九六八「第一回中国語検定試験中止の事情について」『中国語』一〇四・二〇一二。

六角恒広一九九四『中国語書誌』東京：不二出版。

(えんどう・まさひろ 中央大学)

百花繚乱 中国リアリズムの煌めき

中国第12回全国美術展受賞優秀作品による「現代中国の美術」

世界のアートシーンが注目！ 中国政府主催のもと五年に一回開催される「全国美術展」は、中国全土から二万点以上の応募作品が寄せられる最大規模にして、最も権威ある公募展として知られています。本展では、二〇一四年一月に開催された「第二回全国美術展」の受賞優秀作品の中から、更に日本側主催美術館の学芸員が厳選したおよそ八〇点を展示します。確かな技術に裏打ちされた現代中国アートの数々をぜひ間近でご堪能ください。

▼会期…4月10日(日) ▼開館時間…10時00分～17時00分
▼休館日…火曜日 ▼観覧料…会期中何度でも入場可能なパスポート券 一般四〇〇円(団体割引二〇名以上三〇〇円/名) 大高生二〇〇円、中学生以下無料 ▼会場…日中友好会館美術館(文京区後楽1-5-3) ▼主催…(公財)日中友好会館、中国美術家協会、毎日新聞社 ▼助成…(公財)三菱UFJ信託地域文化財団 ▼後援…外務省、文化庁、中華人民共和国駐日本国大使館、(社)日中友好協会、日本国際貿易促进会、(財)日本中国文化交流協会、日中友好議員連盟、(財)日中経済協会、(一社)日中協会 ▼巡回館…福岡アジア美術館 4月16日～5月22日 ▼お問い合わせ…公益財団法人 日中友好会館 文化事業部 電話：03-3815-5085 FAX：03-3811-5263 e-mail：bunka@jcf.or.jp URL：<http://www.jcf.or.jp/blog/archives/7421>